

## 看護系大学生のライフスキルに 関する研究

—基礎看護学実習の効果の検討—

小林千世\*・柳沢節子\*・松永保子\*

### Research on the Daily Life Skills of Student Nurses: The Effect of Clinical Practicum in Fundamental Nursing

Chise KOBAYASHI, Setsuko YANAGISAWA  
and Yasuko MATSUNAGA

The aim of this study was to investigate the factors contributing to the improvement of daily life skills in student nurses. A "Daily Life skills Scale" questionnaire survey was conducted on freshman and sophomore student nurses from A University. Four factors were found to be significantly different before and after their clinical practicum in fundamental nursing: "knowledge summarization" of personal situations; "positive thinking"; interpersonal situations; and "interpersonal manner" of interpersonal situations. Freshman students demonstrated improved "interpersonal manner", "interpersonal skills" and "knowledge summarization." Sophomore students demonstrated improved "positive thinking." These results suggested that clinical practicum can lead to improved daily life skills. Influencing factors included the experience that a relationship was built upon based on personal manners, information collected and organized, a sense of fulfillment and satisfaction with the clinical practicum.

**key words:** life skills, undergraduate students of the nurse course, Clinical practicum

#### 緒 言

近年の学生は機械化され、効率化された生活環境で成長し、模倣や誰かに教わらなくても身の回りのことができる生活実態である。日常生活行動が自分自身のために向きやすく、他者のために何かするとか配慮することが少ない傾向があると指摘されている(高井・茶碗谷・前垣・磁野・泉澤・辻, 2010)。また看護学実習において、他者への思いやりやコミュニケーション能力、日常生活技術、ソーシャル技術などの乏しさを困難さを感じている学生も多い(川田・木村・木暮・小林・林・狩野, 2006)。これらのことは、「看護学生は看護職として療養生活支援に必要な生活体験や多様な年齢層との対人関係構築の経験が乏し

い」ことを示唆していると考えられる。このような学生が看護職としての実践力を身につけていくためには、学生生活のなかで生じる問題に対して効果的に対処する能力「ライフスキル」を身につけることが重要であると考えられる。

ライフスキルは、対人場面で展開される社会的スキルを包括した心理社会的能力と位置づけられる、「日常生活の中で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」(WHO, 1997)である。島本・石井(2006)は、ライフスキルを「行動や内面的な動き」ととらえ、「効果的に日常生活を過ごすために必要な学習された行動や内面的な動き」と定義し、体育の授業や運動部の部活動におけるスポーツ経験がスキルの獲得の要因であることを明らかにしている(島本・石井, 2009; 島本・石井, 2010)。

基礎看護学実習は看護教育の比較的初期に履修され、教員にとって学生の成長を実感する機会でもある。したがって、基礎看護学実習が学生のライフスキルの獲得の要因となりうると考え、基礎看護学実習前後の学生のライフスキルの状態を明らかにし、ライフスキル獲得のための効果的な指導方法について検討することにした。

#### 方 法

**研究期間:** 平成18～22年。**対象:** A大学において平成18～22年度に基礎看護学実習Ⅰ(以下、基礎Ⅰ)あるいは基礎看護学実習Ⅱ(以下、基礎Ⅱ)を履修した学生。**調査時期・方法:** 基礎Ⅰ・Ⅱの開始前および終了後に、無記名式の質問紙を直接配布し、留置き法にて回収箱で回収。**調査内容:** ライフスキルの獲得レベルを「計画性」「情報要約力」「自尊心」「前向きな思考」「親和性」「リーダーシップ」「感受性」「対人マナー」の八つの側面から評価する計24項目から成る「日常生活スキル尺度」を使用した。この尺度は、個人的スキル(「計画性」「情報要約力」「自尊心」「前向きな思考」と対人スキル(「親和性」「リーダーシップ」「感受性」「対人マナー」)の下部尺度から構成されている。**倫理的配慮:** A大学医学部医倫理審査委員会による審査、承認を受け実施した。**分析方法:** 「日常生活スキル尺度」は評定値が高いほど高得点に配点し、24項目の合計点(以下、ライフスキル得点)、個人的スキルの合計点と、対人スキルの合計点、八つの側面それぞれの得点を算出した。算出したおのおの得点について、基礎Ⅰ・Ⅱの前後でt検定を用いて比較した。

**A大学における基礎看護学実習について:** 基礎Ⅰは、1年後期2月に4日間、基礎Ⅱは2年前期8～9月に9日間、医学部附属病院において実施する。基礎Ⅰの目的は、「患者を受け持ち、コミュニケーションや生活援助を通して患者の入院生活および入院生活に対する思いを知り、生活上の問題と看護の実際を学習する」である。基礎Ⅱの目的

\* 信州大学医学部保健学科

Division of Nursing, School of Health Sciences, Shinshu University, 3-1-1 Asahi, Matsumoto-shi, Nagano 390-8621, Japan  
e-mail: ckobaya@shinshu-u.ac.jp

は、「患者の日常生活に関する援助について看護過程に沿って実施・評価することを学ぶ」である。ともに患者1名を受け持ち、スケジュールおよび実習の内容を教員やスタッフと検討・調整してケアに参加する。

結 果

5年間で回収された質問紙は、基礎Ⅰ前55名、基礎Ⅰ後62名、基礎Ⅱ前24名、基礎Ⅱ後49名の計190名であり、回収率は38.7%であった。

ライフスキル得点の平均点は、基礎Ⅰ前62.0±9.2点、基礎Ⅰ後65.1±8.6点、基礎Ⅱ前62.0±9.0点、基礎Ⅱ後65.5±8.4点であった。実習前後でt検定の結果、どちらも有意な差は認められなかった。また、下位尺度での平均点はTable 1のようであった。

基礎Ⅰ前後での比較：＜個人的スキル＞と＜対人スキル＞では、＜対人スキル＞において基礎Ⅰ後が有意に高かった(t=2.1, p<0.05)。また、＜個人的スキル＞では、「情報要約力」において基礎Ⅰ後が有意に高かった(t=2.4, p<0.05)。＜対人スキル＞では、「対人マナー」において基礎Ⅰ後が有意に高かった(t=2.1, p<0.05)。

基礎Ⅱ前後での比較：＜個人的スキル＞と＜対人スキル＞において、有意な差は認められなかった。＜個人的スキル＞では、「前向きな思考」において基礎Ⅱ後が有意に高かった(t=2.7, p≤0.01)。

考 察

実習前後のライフスキルの変化とその要因

基礎Ⅰ後に＜対人スキル＞で向上が認められたことは、初めて患者を受もつ実習経験が対人スキルに大きな影響を及ぼすと推察された。看護学生も異世代との会話ができないことや敬語が使えない、挨拶ができないなどの問題が指摘(高井他, 2006)されている。本研究において、基礎Ⅰ後に＜対人スキル＞のとりわけ「対人マナー」で差が認められたことは、初めての実習である基礎Ⅰにおいて、日ごろの友達や家族とのかかわりとは異なるマナーを必要とする経験をしたことを示していると思われた。さらに、それらを踏まえないと円滑な人間関係を構築し維持することができないことや、看護実践もできないことを学んだと考えられた。

また、「情報要約力」も基礎Ⅰ後に向上が認められた。情報要約力は、大量の情報から重要な情報を選び秩序立てて再構成する能力であり、患者を理解し、よりよい看護実践につなげるための第一歩である。基礎Ⅰにおいて、コミュニケーションを通して対象を理解することができ、その経験によって患者の日常生活について系統的に情報を収集し、要約するということが非常に重要であることを学んだものと推察された。

基礎Ⅱ後では、「前向きな思考」において向上が認められた。「前向きな思考」はWHO(1997)によると「ストレスに対処するスキル」に相当し、島本・石井(2009)は、「前向きな思考」が生きがい感の現状満足や意欲と正相関があると報告している。今回の学生も、実習に対する満足感や看護に対するやりがいといった意欲を感じ、「前向きな思考」の向上につながったものと推察された。実習期間が1週間である基礎Ⅰに比較して基礎Ⅱの実習は2週間と長く、看護過程の展開や患者との主体的なコミュニケーションを実感でき、実習に対する十分な満足感や充実感を得られているためと考えられる。

効果的な指導方法の検討および今後の課題

今回の結果を踏まえて、人間関係の構築や情報収集・整理能力の向上、学習への満足や充実感を得られるような効果的な指導方法を検討していくことが必要である。

さらに、有意な差が出なかった基礎Ⅰにおける「前向きな思考」や基礎Ⅱにおける「情報要約力」などについても検討する必要性もある。

引用文献

川田智美・木村由美子・木暮深雪・小林三重子・林元子・狩野太郎 2006 看護教員が学生の生活体験の乏しさを感じた実習場面 群馬保健学紀要, 26, 133-140.  
島本好平・石井源信 2006 大学生における日常生活スキル尺度の開発 教育心理学研究, 54(2), 211-221.  
高井奈津子・茶碗谷草子・前垣綾子・磁野和恵・泉澤真紀・辻慶子 2010 看護学生の日常生活体験の実態調査 北海道文教大学研究紀要, 34, 103-111.  
WHO(編)(川畑徹朗・西岡伸紀・高石昌弘・石川哲也監訳) 1997 WHO・ライフスキル教育プログラム 大修館書店 p. 122.

(受稿: 2013.2.9; 受理: 2013.3.9)

Table 1 ライフスキル尺度得点

| ライフスキル得点 | 個人的スキル     | 計画性      | 情報要約力   | 自尊心     | 前向きな思考  | 対人スキル   | 親和性      | リーダーシップ | 感受性     | 対人マナー   |          |
|----------|------------|----------|---------|---------|---------|---------|----------|---------|---------|---------|----------|
| 基礎Ⅰ      | 実習前 (n=55) | 29.1±5.8 | 7.4±2.2 | 7.3±1.5 | 7.0±1.8 | 7.4±2.5 | 33.0±5.0 | 7.7±2.0 | 6.3±1.9 | 9.3±1.6 | 9.8±1.9  |
|          | 実習後 (n=62) | 30.4±5.6 | 8.1±2.0 | 7.9±1.3 | 7.2±2.1 | 7.3±2.5 | 34.8±4.0 | 7.8±1.9 | 6.9±1.8 | 9.6±1.4 | 10.4±1.6 |
| 基礎Ⅱ      | 実習前 (n=24) | 29.0±5.5 | 7.6±2.0 | 7.9±1.8 | 7.0±1.9 | 6.5±2.3 | 33.0±5.1 | 7.5±1.7 | 6.8±2.3 | 9.1±1.4 | 9.7±1.9  |
|          | 実習後 (n=49) | 30.7±5.3 | 7.7±1.9 | 7.5±1.5 | 7.4±1.8 | 8.0±1.1 | 34.9±5.6 | 8.5±1.7 | 7.0±1.8 | 9.3±1.5 | 10.1±2.0 |

\*: p<0.05